

41 年目に突入した「臨牀透析」

鈴木 正司*

本誌「臨牀透析」は創刊されてから 41 巻目に突入し、本年 1 月号は第 41 巻 1 号となった。人でいえば、満 40 歳を迎えたことになる。一方では、わが国が明治維新になって、従来までの東洋医学から西洋医学の導入へと大きく舵を切ってから 150 年以上も経過している。そして本邦の臨床医学系の歴史ある定期刊行誌のなかには、優に 100 年以上の歴史を有するものもある。そのようななかにあって、本誌が 41 年目に突入することなどは、ことさら誇るべき事柄でもないものかもしれない。しかし考えてみれば、割合に狭い臨床分野＝透析医療を対象としながらも、この医療に携わる読者諸氏の熱い支援に支えられて足掛け 40 年、現在まで来られたことは喜びとして捉えてもお叱りは受けないであろう。

さて、本誌が創刊される少し前から腎不全・透析医療の分野から見ると革命的とも言える発見や治療の進歩が始まった。それらは……活性型ビタミン D の発見と薬剤化が最初である。その後にエリスロポエチンの遺伝子工学的生産、カルシウム感受性受容体の発見からカルシミメティクスの開発による二次性副甲状腺機能亢進性の抑制などがある。さらには、アルミニウムは腎機能が低下・喪失した人体にとっては極めて有害であること、透析アミロイド症の発見とその原因物質は β_2 -ミクログロブリンであることなども解明され、透析治療では一部の少分子蛋白も除去対象となることが判明した。このような腎不全・透析治療の流

* 信楽園病院附属有明診療所

れのなかの幾つかの大きな転換点でも、本誌はいつも躍動していたといえよう。このことは草創期の編集委員の一人として誇らしく思っている。

小生が臨床現場から半歩後退した後も、低酸素誘導因子（HIF）阻害薬による腎性貧血の治療が始まった。さらには、吸着に因らずにリンの吸収機序を阻害する Na^+/H^+ 交換輸送体阻害薬が登場した。

喜ばしいことには、40年前に本誌第1巻1号を生み出すべく御茶ノ水の山の上ホテルに集合した、前田貞亮先生をはじめとする草創期の編集委員の面々の熱気と心意気が、本誌第41巻にも綿々と受け継がれている。一つだけ残念なことは、これら草創期の編集委員の幾人かは既に鬼籍に入られて居られることである。